

二葉亭訳『おひたち』について

沢 田 和 彦

はじめに

『おひたち』はИ. А. ゴンチャロフの第二の長編小説『オブローモフ』(1859年)の第一編第九章『オブローモフの夢』から、二葉亭四迷(本名長谷川辰之助)が部分訳を行なったものである。この翻訳は訳者の死後、大正2年3月発行の『文章世界』第八卷第三号に発表された。そこには訳文に先立って記者の付記が添えられており、これを信ずるならば、『おひたち』は明治21年7-8月頃に訳出されたということになる。そしてこの訳稿は未定稿で、森田思軒の遺族の許にあったという¹⁾。だが同時にこれは完成度の高い未定稿と筆者は考えたい。それは、後述のように、何よりも訳文を検討すれば明らかなのだが、加えて、明治34年頃の執筆と思しき二葉亭の経歴書(草稿)の「翻譯書目」の項に、「ゴンチャロフ小説類」が挙げられている事実²⁾を引証したい。二葉亭はこの経歴書で2歳多くサバを読み、また同じ「翻譯書目」の項にドストエフスキイをも挙げていることからして、その信憑性を問題にする向きもあろうが、筆者はこれを、二葉亭が『おひたち』を未完作として無視していなかったこと、いやそれどころか、発表済みの他の翻訳と同等視していたことの証左と取りたいのである。

しかるにこの翻訳発表後の反響は、管見によれば、皆無である。大正2年度の主要雑誌を繙いてみても、同年刊行の『二葉亭全集』第四巻の紹介乃至書評は散見されるものの³⁾、この新たに発見された翻訳に関する言及は一行たりとも見出されず、看過されたと言ってよい。そしてその傾向は今日でも依然として同様である。従ってこの翻訳を検討することは、決して無意味な作業ではないと筆者は考える。

まず翻訳の底本の問題から始めると、二葉亭が在学した東京外国語学校（以下「外語」と略記、後に東京商業学校に改廃統合）の図書館所蔵の露文図書で、該当箇所を含むものは次の3冊である。

ソコロフ編『国語 中学校用ロシア語アンソロジー』第二巻（Соколов, В. (сост.) Родная речь. Русская хрестоматия для средних учебных заведений. ч. 2, М., 1891.)

フィローノフ編『中学校高学年用ロシア語アンソロジー 第一巻 叙事詩篇』（Филонов, А. (сост.) Русская хрестоматия с примечаниями для высших классов средних учебных заведений. ч. 1. Эпическая поэзия. Изд. пятое, значительно исправленное. СПб., 1875.)

バシストフ編『ロシア語教授用詩文選（分析・作文用）第二課』（Басистов, П. (сост.) Хрестоматия для употребления при преподавании русского языка. Курс 2, М., 1876.)

但しソコロフのアンソロジーは1891年、即ち明治24年という発行年からして、一応除外されうる。結論から言えば、筆者はフィローノフのアンソロジーを『おひたち』の底本と考えたい。その論拠としては、次の六点を挙げることができる。

1. このアンソロジーが外語4・5年の文法、修辞、文学史の時間の教科書として使用され⁽⁴⁾、二葉亭がそれに接する機会があったこと。

2. 明治21年3・4(?)月と22年冬頃、二葉亭が矢崎鎮四郎に宛てた2通の書簡にそれぞれ、「兼而恩借致居候露國文章軌範中より『學術と美術との差別』と題する論文を國民之友投書可致積にて既に翻譯仕り候ゆえ……」; 「……恩借の貴稿吝嗇家之肚露國文章軌範并に十全法話ハ與に桑原方まで差出置候間……」⁽⁵⁾とあり、当時「露國文章軌範」と呼ばれたこのアンソロジーを、二葉亭が矢崎から借用していたことが判明すること。

3. 二葉亭が訳文の前書きで、この次に訳そうと述べたにもかかわらず訳出されなかった(と思われる)、オブローモフがシュトルツに自己の生活の理想を物語る個所も、引き続きこのアンソロジーに収録されていること。

4. 『『アリストテリ』悲壯体院劇論解釈』が同アンソロジー第三巻「劇詩篇」より、また『カートコフ氏美術俗解』が同第四巻「散文篇」より訳出されていること⁽⁶⁾。

5. このアンソロジーのテキストを、今後ゴンチャロフ研究の定本になると思われる八巻本作品集第四巻『オブローモフ』のテキストと校合してみると、都合84個所の異同が認められた。その大部分はコンマ、ピリオド、セミコロン、ダッシュ、ハイフンの異同やミスプリントだが、単語そのものの入れ替わっているケースが5例あった。これらのうちバシーストフのアンソロジーには見られず、フィローノフのみに見出される異同を4例引用し、それに二葉亭の訳語を当ててみると、

“... когда на нее бросились [собрались — 作品集第四巻, 以下同様] с вилами и топорами,” 「…此犬^(ま), 投げ熊手^(むか), 手斧などを提げて對ツた所,⁽⁷⁾

“В [И в (114)] доме воцарилась мертвая тишина.” (522) 「家内には死んだやうな静かさがゆき渡る。」(314)

“... как бы в овраг» ... [«...]» (115)” (523) 「…ヒヨツと坑へ^(あな)でも) …」(316)

“... кто очнется, плюнет или [и (115)] промочит что-то во сне ;” (523) 「…眼を覺ますか, 夢中で唾をするか, 又は何か口の中で云ふ者が有れば,」(316)

二葉亭の翻訳が原文に忠実であることを思い合せれば、上記の個所はフィローノフ底本説の有力な根拠となるであろう。

6. 外語の同級生藤村義苗の回想に見られる如く、「…その頃露西亞の書物といふものは學校より借りるより外には全然街に無かつたのである。」⁽⁸⁾ という、当時の露文図書の絶対数の少なさ。

2

次に原文と訳文の照合に移ろう。本稿では『二葉亭四迷全集』（以下『全集』と略記）第四巻（岩波書店、昭39）の版をテキストとして使用するが、初出のテキストとの間にはルビの有無や句読点等、数多くの異同が認められるので、それはその都度〔 〕で示すこととする。

さて二葉亭訳を詳細に検討して得られた特徴を列挙すると、次の六点になる。

1. 基本的に原文に忠実な、周密体の翻訳であるが、他方代名詞の訳を可能な限り省略し、また明白な主語も訳出していない。逆に副詞、動詞、接続詞や状況語といった形で、原文にない語句を付加したケースも見られる。また原文の副詞や代名詞に、前後の文脈との関連で説明的な訳語を付したり、あるいは思い切った意識を行なった個所も認められる。例えば、

“Там, став на колени” (518) 「聖像の下で跪き,」 (309), “с практической целью” (521) 「それも徒歩ひたひたきではなくて,」 (313), “так, чтобы [чтоб] их отнесло к другому краю” (522) 「向側むかふがはへ」 (315)。

読点も必ずしも原文通りではない。以上より言えることは、句読点も語数も原文に合せようとしたという、談話筆記『余が翻訳の標準』中の二葉亭の有名な言葉は、字義通り『おひたち』には適用できないということである。この点については後に再度触れる。

2. 俗語や日本固有の言葉を訳文に用いていること。

“душенька” (518) 「アイよ」 (309), “семи душ” (518) 「七人の小作」 (309), “Весь этот штат и свита” (519) 「譜代外様ふだいとさまの人々」 (309), “кушать не станет” (520) 「御膳ごぜんも何も喫たべなくならアね。」 (311), “Арапку [犬の名一引用者]” (520) 「黒」 (312), “дрянное вино” (522) 「濁酒にごりざけ」 (314)。

二葉亭が言文一致体草創にあたって、「ポエチカル」⁹⁾な俗語を積極的に摂取しようとしたことは周知の事実であり、この場合もその一例と言える。

3. 「…で。」で言い切る形、いわゆる「デ止め」が散見されること。読点を伴う場合も含むと、都合9例である。水野清氏はこの文末形式を「注釈的な表現」¹⁰⁾と称している。この形式は、尾崎知光氏によると、「明治二十年代から藤村及びその後に至るまで、創作、翻訳両分野にわたって好んで用いられたもの」¹¹⁾であるという。二葉亭の文学活動においては、木坂基氏の頻度数調査によると、「前期『浮雲』時代は特にパーセンテージが高く、中期『うき草』時代の、「である」体による言文一致体を一応確立した頃も、かなりの高い率をもち、後期、『其面影』前後に至って低くなっている」¹²⁾。

更に尾崎氏の興味深い考察を紹介すると、既に一再ならず指摘されているように、この文末形式が江戸文学、例えば三遊亭円朝の講談等に由来することを述べた上で、それが多用される理由の一つとして、氏は翻訳の影響を挙げている。「従属節で終る形は欧文では普通であり、それをそのままの順序で訳すと日本文としては中止の言い方となるからです。」¹³⁾いま『おひたち』に例をとるならば、

“Там нашли однажды собаку, признанною [признанную] бешеною потому только, что она бросилась от людей прочь, когда на нее бросились [собрались] с вилами и топорами, и исчезла где-то за горой;” (519) 「深坑ふかあなで或時犬を見附けた事が有る、此犬、投げ熊手、手斧

などを提^{〔き〕}げて對^{むか}つた所、逃^{〔に〕}げて山の向^{〔かく〕}ふへ匿^{〔ばか〕}れた計^{〔かく〕}りで狂^{〔ばか〕}犬と認められたので。」(310)。

つまり、原文の順序通り前から訳そうとするので、“признанною〔признанную〕 бешеною”以下を後で訳出することとなり、日本語の上で「…狂犬と認められ」と中途半端な形になってしまい、必然的に「デ止め」を用いることになる、というのである。傾聴に値する指摘である。

4. 原文で〈(前置詞+) 形容詞+名詞〉の語結合を、累加的表現で訳出したこと。

“от жаркой любви” (518) 「戀〔ひ〕しさ、なつかしさ」(309), “с радостным изумлением” (519) 「嬉しさうに、珍しさうに」(310), “живой радостью” (519) 「大喜びに喜び」(310), “от пытливого внимания” (520) 「油断の無い、物好きな眼」(312)。

これは偶然の現象ではあるまい。『余が翻訳の標準』に明らかなように、二葉亭は欧文の文体を観察して、それは同意語句の反復によって音調の効果を意図していると見た。それにひきかえ、日本語の文章は「単調(モノトナス)」である。その単調な日本文に彼は「音楽的(ミュージカル)」な原文の音調を移植しようと試みたのだった。上記用例のうち、“с радостным изумлением”という表現について A. Ф. エフレーモフは、「風俗描写に豊かな表現力を付与せんがため、作者は名詞を状況語として用いたのだ。」と述べ、また“от жаркой любви”に関しては、このような「語結合はさほどありふれたものとは思えない。…これらすべての狙いは表現力にある。」¹⁴⁾ というコメントを加えている。二葉亭はこのような点を明確に把握した上で、意識的に累加的表現を用いたのである。

5. 誤訳が計19箇所認められた¹⁵⁾。但し、このうち“Илья Ильич” (519) 「イーリヤ、イーリイチ」(309)などは、厳密に言って、誤訳とは言えないかもしれぬ。またエフレーモフが、「ゴンチャロフの特殊性は…彼が一般に用いられる語彙を使用する際、その特殊なカテゴリー、即ち、日常風俗の語彙に最大の注意を払う点に存している。」¹⁶⁾ と述べているように、『オブローモフの夢』には日用品や食品名が頻出する。そしてこのような名詞の訳語に、二葉亭の苦勞が偲ばれるのである。例を挙げれば、

“булочками, сухариками, сливочками” (519) 「麵包^{〔パン〕}、砂糖^{〔砂糖〕}、乳酪^{〔バター〕}」(309), “соусу” (521) 「醬^{〔けしる〕}」(313), “варений, солений, печений” (521) 「漬物、燒物、鹽漬」(313)。

従って“сухариками, сливочками”「砂糖^[シロ], 乳酪」なども、当時のロシア語学習のレベルや条件、外国の事物に対応する日本語の絶対的不足を考慮に入れるならば、誤訳とは言い切れまい。ツルゲーネフ『父と子』の二葉亭、相馬御風兩訳を比較して前者の苦勞に思いを馳せた、次のような逍遙の言に耳を傾けたい。「…第一あの如き作を譯するに適當な日本語が極めて乏しかつた。制度文物から衣服器具から今では幾らも外國のと相通づるものが備はつてゐる。」¹⁰⁹

その他もほぼケアレス・ミステークの類いだが、ただ一個所、

“...Антип поехал за водой, и по земле, рядом с ним, шел другой Антип, вдсятеро больше настоящего и бочка казалась с дом величистой, а тень лошади покрыла собой весь луг; [,] тень шагнула только два раза по лугу и вдруг двинулась за гору, а Антип [еще] и со двора не успел съехать.” (520)

という場面に登場する下男 Антип を「アンチーブ〔ブ〕(馬^の)」(311)と解したのは、二葉亭らしからぬミスと言えよう。“поехал”, “съехать” という動詞に気づかなかつたものと見える。従つて後の、

“...Антипу, который, перекрестясь, с треском неустрашимо разрушал эту любопытную окаменелость” (522)

を、「…馬は、^[をうつ]尾筒で十字架を描きながら…」(314、傍点は引用者—以下同様)としたのは、これに伴う連鎖反応である。あるいは未定稿のなせる業か。

6. 逆に名訳と思しき個所も数多見られること。2例のみ挙げると、

“...мухи, до тех пор неподвижные, сильно начинают шевелиться, в надежде на улучшение своего положения” (522) 「蠅^どのは不意を打たれて、勝手にわるいと騒ぎ出す」(315), “...проткнет сквозь нее [стрекозу—引用者] соломенку [соломинку] и следит как она летает с этим прибавлением” (523) 「藁を胴へ通してそれが、此小^こ荷^づ物^けを背負^せつて、^[と]蜚^ひんで行くを見送る。」(316)。

エフレーモフはゴンチャロフの文体の特徴として、「文語的な、また公式的、事務的な単語、語結合と、日常生活上の名称とを対比すること¹¹⁰」によってイロニーを醸し出す手法を挙げているが、上記二文はその好例であつて、それぞれ「蠅^どの」、「小^こ荷^づ物^け」はゴンチャロフ独自のユーモアを伝ええて妙である。

3

次に、嵯峨の屋おむろ(本名 矢崎鎮四郎)が『おひたち』の前半に該当する

部分を訳出しているので、その翻訳との比較検討を試みたい。

嵯峨の屋による『オブローモフの夢』の部分訳、『オブローモフの幼時』のテキストは三種類存在する。『志がらみ草紙』第55号（明27・4）所載の初訳（筆名 探美生）、『家庭雑誌』第16号（明28・9）所載の改訳（矢崎孤村）、そして第二創作集『文の庫』（明29）所収のもの（嵯峨の舎主人）である。ここでは原則として初訳のテキストを使用し、必要に応じて改訳にも目配りをするものとする。ちなみに、嵯峨の屋は二葉亭と同じ底本を用いたものと思われる²⁴。

さて『オブローモフの幼時』の特徴を要約すると、次の三点である。

1. 副詞、接続語、状況語や原意を敷衍した文等、原文にない語句、文章を嵯峨の屋が恣意的に付加した例が顕著なこと。これに比すれば、二葉亭訳の方が遙かに原文に忠実である。

2. 前章第五点で指摘した二葉亭の誤訳例のうち、“ворчавшую” “осмотрел”, “Антип”等を嵯峨の屋が正確に訳出したケースもあるが、概して嵯峨の屋の方が誤訳が遙かに多いということ。原文約2頁半にして23箇所である²⁵（二葉亭の場合は原文6頁弱で19箇所）。二葉亭訳に比して文意そのものに関わる誤訳が散見されること、完了体動詞の時制の誤りが目立つこと、が嵯峨の屋訳の特徴である。

3. 更に問題となるのは、翻訳というものに対する両者の態度の相違である。2の誤訳例のうちまず“запах сирени”（518）に着目すると、二葉亭は“сирени”（「ライラック」）という語に固執して「シレンニ（植物の名）」（309）と訳し、他方嵯峨の屋は「青葉」（2）とかわした。しかるにこの場面で窓から室内に流れ込んでくるのは、「ライラックの香り」以外の何物であってもならない。何となれば、『オブローモフ』第二編から登場するヒロイン・オリガ—彼女の使命は主人公のオブローモフシチナと闘い、彼を活動的な人間に立ち直らせることだが—そのオリガのオブローモフへの愛の象徴の一つが「ライラックの小枝」であって、これは全編で都合25回反復される²⁶。そのライラックが『夢』でオブローモフ少年を戸外の活動へと誘うということ、換言すれば、彼が室内にとどまって乳母や召使いにかしずかれ、徐々にオブローモフシチナを体得していくのを妨げることになるのである。即ち、この場面は明らかに後のオリガの登場の伏線になっているのである。エピソードでもライラックの枝が、その花言葉よろしく「若き日の思い出」として、オブローモフの墓標を飾っている。以上より、この“сирень”は『オブローモフ』におけるキーワードの一つであり、従って単なる「青葉」であってはならないのである。二葉亭が上

述の点を認識していたかどうかは疑問だが、少なくとも彼の方が嵯峨の屋より良心的な翻訳態度を持していたと言えるのではないだろうか。

もう一例挙げると、“в овраг свозили падаль” (519) を嵯峨の屋は「ねバケが出る」(3) と訳した(二葉亭訳「畜類の死骸が幾干ともなく瘞めてある。」(310))。これは明らかに誤訳だが、筆者が問題としたいのはそのこと自体ではなく、この個所が改訳及び『文の庫』のテキストでは削除されてしまったという事実である。では何故削除されたのか。思うに、嵯峨の屋がこの個所を十分に解しえなかったからではないか、少なくともその自信を欠いたからではないか。実は元来初訳の時点から、このように訳出されなかった部分が都合6個所存している²⁴。このうちにも、或いは解釈が難解なために故意に省略された例が含まれているのかもしれない。このように見てくると、やはり二葉亭の方が嵯峨の屋より遙かに厳しい翻訳態度を保持していたと言えると思う。まして前者の翻訳が未定稿なのに対し、後者には二度稿を改める機会があったことを考慮に入れるならば、両者の差は歴然としたものとなる。

では両者のこの〈優劣関係〉を如何に把握すべきか。例えば森鷗外は、二葉亭の翻訳について、次のように冷徹な評価を下している。「翻譯がえらいといふことだ。僕は別段にえらいとも思はない。あれは當前だと思ふ。翻譯といふものはあんな風でなくてはならないのだ。あんな風でない翻譯といふものが随分あるが、それが間違つてゐるのである。」²⁵ しかしながら、これは同じく名翻訳家鷗外ならではの言であって、筆者はむしろ次のような内田魯庵の証言に、明治20年代の一般的な翻訳事情の反映を読みとりたいのである。「其頃の翻譯は皆筋書であつた。大體の筋さへ通れば勝手に省略したり刪潤したり、甚だしきは全く原文を離れて梗概を祖述したものであつた。」²⁶ 従って、嵯峨の屋の訳業を一概に非難できないのではないか。むしろ二葉亭の仕事の方が、やはりそれだけ当時の翻訳界から傑出したものであつた、と筆者は考えたい。

4

最後に二葉亭の初期の訳業における『おひたち』の位置づけということ、少なくともそのための手がかりを探してみたい。

本稿第二章で挙げた『おひたち』の特色の多くは、『あひぶき』、『めぐりあひ』それぞれの初訳にも該当する。即ち第二点、俗語の使用が両訳にも見られることは言を俟たず、また第三点の「デ止め」の用法は、水野氏の調査によれば、『あひぶき』に6例、『めぐりあひ』には22例使用されているという²⁷。第

四点の累加的表現による訳出法も、『あひゞき』に見られる。

「面白さうな、笑ふやうなさゞめき、一と小雨が忍びやかに、怪し氣に、私語するやうにパラ／＼と降ツて通ツた。」²⁴⁾

もっともこれは、元來形容詞が豊富なツルゲーネフの文体も考慮に入れねばなるまい。更にもう一点、木坂氏の接続語の頻度数調査によると、『あひゞき』、『めぐりあひ』初訳において「が」、「そして」、「また(又)」の集中的使用が認められるという²⁵⁾が、この傾向は『おひたち』においてもほぼ同様であって、「が」は逆接の接続語中最高位の3例、「また(又)」は6例で順接の接続語中第2位、「そして」は5例で第3位を占めることを付言しておく。

次に逆に相異点について述べよう。かつて安田保雄氏は、『めぐりあひ』、少なくとも「自分」とルキヤーヌィチの会話に入るまでの前半部分は、『あひゞき』より先に訳出されたのではないか、という仮説を提唱した²⁶⁾。筆者もこの説に従うと、『おひたち』についても『あひゞき』と同様のことが言えるのではないか。つまり、第二章で述べたように『おひたち』は必ずしも原文に過度に忠実ではないこと、割注の使用が4例と少なく、かつすべて簡潔であること²⁷⁾、英訳の挿入が皆無であること等からして、『おひたち』も『めぐりあひ』、少なくともその前半部より後に執筆されたと考えたいのである。

では『あひゞき』との先後はどうだろうか。この問題は容易に解決し難いが、一つめどになると思われるのは、『おひたち』に歴史的現在形が頻出することである。周知の如く、『オブローモフの夢』にはオブローモフカの典型的な一日が描写されており、その生活パターンは日々反復される。そしてそれを示すべく、そこでは不完了体動詞現在形、完了体動詞現在形と共に不完了体過去形が多用されている。この不完了体過去形を、二葉亭はしばしば歴史的現在の形で訳出したのである。

“наблюдал” (522) 「觀察をしてゐる。」 (315), “следил глазами” (523) 「見送る。」 (316)

等、その例は枚挙に遑がない。他方、水野氏の指摘によれば、この形は『あひゞき』、『めぐりあひ』初訳で少なく、それぞれの改訳で増加するという²⁸⁾。

もう一点めどになると思ひきは、『おひたち』に欧文の直訳語出自の「デアル」の用例が4例認められることだ²⁹⁾。尾崎氏は、「ダ調」で書かれた『あひゞき』、『めぐりあひ』初訳にこの用例は皆無であるとし、その理由として「まだこの頃の二葉亭には『デアル』を自由に使いこなすだけの力量もなく、また文章の世界において、一般にそうした表現を許容する背景も弱かったためであ

ろう』⁹⁴と述べている。一方それぞれの改訳は、山本正秀氏の指摘の如く⁹⁴、「デアル」調に改められている。

以上二点より、『おひたち』は『あひゞき』より後に訳出されたと考えられないだろうか。「…[おひたちは—引用者] 恐らくあひゞき以前のものであらう。文章も何處となく稚くぎこちない。」⁹⁵という金子無絃の言説は、筆者には容認し難い。『あひゞき』、『めぐりあひ』の翻訳を明治21年春頃（『めぐりあひ』は「青葉の頃」⁹⁶）のこととすると、本稿冒頭で述べた明治21年夏『おひたち』訳出説は、ここでも肯定材料を得ることとなる。このように見てくると、『おひたち』という翻訳は二葉亭の訳業において、その初期から約7年間の中断を経た第二期『片恋』（明29）時代へと移行する際の、言わば〈里程標〉の如き位置を占めているのではないか、と考えられるのである。

おわりに

以上述べたことは、しかしながら、『おひたち』の有する意義の、恐らくまだ一半のことでしかない。何となればこの翻訳は、明治21年夏という執筆時期からして、また後の二葉亭自身の発言からして、『浮雲』の創作とも関連を有しているであろうからだ。即ち、この小説は第一篇発表が明治20年6月、第二篇が明治21年2月、第三篇が明治22年7-8月のことであり、従って、『おひたち』は『浮雲』第三篇執筆を前にして訳出されたということになる訳である。この困難窮まりない問題については、今後の研究に期したいと思う。とまれ、この『おひたち』は二葉亭の翻訳史、創作史双方の上で、看過できぬ作品たることは疑いない。

それにしても、もし仮に二葉亭が『おひたち』を翻訳直後に発表していたとすれば、どうであったろうか。『あひゞき』が好評を博した理由の一つとして、その林間描写が挙げられる。この点から言って、『おひたち』が『あひゞき』ほどのセンセーションを惹起しえたかどうかは疑問だが、少なくとも大正初期に日の目を見た時のような冷遇は受けなかったろうし、以後の我国におけるゴンチャロフの受容が自ずと異なった途を歩んだであろうこと、これもまた確かである。

註(1) このあたりの事情について詳しくは、拙稿「ゴンチャロフと二葉亭」、『比較文学年誌』17、早稲田大学比較文学研究室、昭56、30-31頁参照のこと。

(2) 『二葉亭四迷全集』第八巻、岩波書店、昭40、183頁。

(3) 『早稲田文学』3-89、大2・4、400頁、『新潮』19-3、大2・9、126頁に同全集所

- 収の『おひたち』の言及が見られるが、前者では「オブローモフ」作となっており、当時の興味の度合が推察できる。
- (4) 北岡誠司「『小説総論』材源考—二葉亭とベリンスキー—」、『日本文学研究資料叢書 坪内逍遙・二葉亭四迷』所収、有精堂、昭54、174頁。
- (5) それぞれ『二葉亭四迷全集』第七巻、昭40、163、391頁。傍線は引用者—以下同様。
- (6) 前掲北岡論文、174-175頁。
- (7) それぞれ Филонов, А. (сост.) Указ. хрестоматия. с. 519.; И. А. Гончаров, Собрание сочинений в восьми томах. т. 4, М., “Худ. лит-ра”, 1979, с. 110.; 『二葉亭四迷全集』第四巻、昭39、310頁。以下それぞれの引用は、本文中の括弧内に頁数を示す。なおアンソロジーの旧正字法は新正字法に改めた。
- (8) 藤村義苗「旧外国語学校時代」, 坪内逍遙・内田魯庵編輯『二葉亭四迷 各方面より見たる長谷川辰之助君及其追懐』(以下『二葉亭四迷』と略記) 所収、易風社、明42、上ノ22頁。
- (9) 「余が言文一致の由来」, 『全集』第五巻所収、昭40、172頁。
- (10) 水野清「『浮雲』『あひびき』『めぐりあひ』—地の文における文末語について—」, 『言語生活』80, 昭33・5, 63頁。
- (11) 尾崎知光『近代文章の黎明—二葉亭「浮雲」の場合—』増訂版、桜楓社、昭52、72頁。
- (12) 木坂基『近代文章の成立に関する基礎的研究』風間書房、昭51、190頁。
- (13) 尾崎知光、前掲書、73頁。
- (14) Ефремов А. Ф. Язык и стиль IX главы романа И. А. Гончарова “Обломов”.—Рус. язык в школе, М., 1962, №3, с. 30, 31.
- (15) 本文中に引用するものを除くと、“за [ee] стулом” (518) 「^[そは]卓の側に立って」(309), “ворчавшую” (518) 「^[つぶや]呟[や]いてゐられる。」(309), “осмотрел” (519) 「^[あたり 視廻]四邊を視廻[は]して」(310), “будет болеть” (520) 「^[つか]頭痛がして」(311), “позаботится” (521) 「世話を焼いて(水を^[つか]飼はせる)」(313), “подрезать” (521) 「^[あはら]代らせよ[や]う」(313), “рубцы” (521) 「^[あはら]筋」(313), “в Обломовке” (521) 「オブローモフ家で」(313), “птица” (521) 「家畜」(313), “пятницы” (522) 「土曜日」(314), “черепка” (522) 「^[あぶ]脳蓋骨」(314), “жук” (522, 523) 「^[あぶ]虻」(314, 316), “потерять драгоценные минуты” (522) 「大切な用を忘れてゐたやうに」(315), “наказов” (523) 「^[あぶ]厳しく談じられる」(315)。
- (16) Ефремов А. Ф. Указ. статья, с. 27.
- (17) “сухарик” を “сахар” と混同したのであろう。
- (18) 坪内逍遙「長谷川君の性格」, 『二葉亭四迷』所収、上ノ225頁。
- (19) Ефремов А. Ф. Указ. статья, с. 33.
- (20) 詳しくは拙稿「日本におけるゴンチャロフの受容について—翻訳・研究史概観—」, 『ロシア語ロシア文学研究』13, 昭56, 76頁参照のこと。
- (21) 本文中で引用するものを除くと, “за [ee] стулом” (518) 「^[あぶ]椅子の周囲で」(『志

がらみ草紙』55, 明27・4, 2頁。以下括弧内に頁数を示す)。“и немного помешанный деверь его матери, и помещик семи душ,” (518)「父の弟で、少し氣のへんな七人持の領主の…」(2), “сухариками, сливочками” (519)「果物や、菓子で」(2), “козлу” (519)「鹿」(2), “нашли однажды собаку” (519)「何時歟中よく来た犬, あの例の…」(2-3), “которых или в том краю…не было.” (519)「其は何處歟の遠くに居る,」(3), “с севшей на середине деревянной кровлей” (519)「家根の中央を板葺にした所の朽て」(3), “запущенным” (519)「古風な」(3), “огибавшую весь дом висячую гал[л]ерею” (519)「家中の人を閉口させる廊下」(3), “скотный двор” (519)「藥小屋」(3), “чего Боже [боже] сохрани,” (519)「どうぞ神様お守り下さいまし,」(3), “И целый день и все дни и ночи” (519)「實に日がな一日, 晝も, 夜も,」(4), “суматохой” (519)「驚いたり」(4), “страхом, что он упадет и расшибет нос” (519)「大事の此た子が轉んだので, 鼻でも打はしなかつたらう歟, と喫驚したり」(4), “от всего” (520)「其他總ての物から」(4), “горит огнем” (520)「旭日の影に輝いで居るのと,」(4), “а ужо будет и там светло” (520)「あれ, 彼處ももう明るくなつて往つた,」(4), “как завидит издали” (520)「遠くの方へ見江たものだから」(5), “еще шаг — и он уйдет” (520)「もう一足進んで見ました。…往てしまひましたよ。」(5), “будет болеть” (520)「頭が痛くなるよ,」(5), “как и что делают взрослые” (520)「人々の仕事を」(5)。

(22) Э. М. Рутгнер. Лейтмотив у И. А. Гончарова и параллели в произведениях Томаса Манна. — Russian Literature, 6, 1974, с. 118.

(23) “Обломов, увидев давно умершую мать, и во сне затрепетал от радости, от жаркой любви к ней: у него, у сонного, медленно выплыли из-под ресниц и стали неподвижно две теплые слезы.”, “не метался ли во сне”, “став на колени” (以上518), “непрошенных”, “висячую”, “которая без того, может быть, угасла бы давным-давно.” (以上519)。

(24) 森林太郎「長谷川辰之助氏」, 『二葉亭四迷』所収, 下ノ4頁。

(25) 内田魯庵「二葉亭四迷の一生」, 『思ひ出す人々』所収, 春秋社, 大14, 299頁。

(26) 前掲水野論文, 63頁。

(27) それぞれ『全集』第一卷, 昭39, 158, 159頁。

(28) 木坂基, 前掲書, 295-296頁。

(29) 『『あひまき』と『めぐりあひ』はどちらが先に翻訳されたか —一つの仮説—』, 『比較文学論考』所収, 学友社, 昭44, 26-44頁。

(30) 「シレン = (植物の名)」(309), 「アンチーブ[ブ] (馬の名)」(311), 「クブ[ヴ]ァス (醋い)」(313), 「イリュ[ユ]ーシャ (イリヤをやき)」(317)。

(31) 前掲水野論文, 64頁。

(32) 「…姿である。」(309), 「…事であらう。」(311), 「…見巡はるのである。」, 「…どれほどであらう！」(以上313)。

- ㉓ 尾崎知光, 前掲書, 70頁。
 ㉔ 山本正秀『近代文体発生の史的研究』岩波書店, 昭40, 507, 512頁。
 ㉕ 金子無絃「二葉亭とロシア文学(二)」, 『国語国文の研究』11, 昭2・8, 61頁。
 ㉖ 前掲安田論文, 32頁。

О переводе Футабатэй “Детство” (“Ойтати”)

Кадзухико САВАДА

Хасэгава Тацуносукэ, известный под псевдонимом Футабатэй Симэй, перевел отрывок из IX главы первой части романа “Обломов” И. А. Гончарова, “Сон Обломова” и озаглавил его “Детство” (“Ойтати”). Этот незаконченный перевод был сделан летом 1888 года, но опубликован в 1913 году после смерти автора. Оригинал перевода послужила, по всей вероятности, “Русская хрестоматия с примечаниями для высших классов средних учебных заведений. ч. 1 Эпическая поэзия” (Филонов, А. (сост.) Изд. 5-ое, знач. испр. СПб., 1875).

Сопоставление “Детства” с оригиналом выявляет следующие отличительные черты этого перевода:

1. Это в основном близкий к оригиналу, но вместе с тем не всецело дословный перевод.
2. Наличие просторечий и присущих японскому языку оборотов речи. Как известно, Футабатэй, работая над стилем, так называемым “гэмбун итти тай” — стилем, основанным на принципе единства языка литературного и разговорного, широко пользовался “поэтическими” просторечиями. Это один из примеров такого языкового новаторства.
3. Перевод имеет 9 примеров “дэ домэ” (т. е. предложений, заканчивающихся частицей “дэ”). Это “комментарное выражение” часто встречается в произведениях начала и середины литературной деятельности Футабатэй, а в конце ее редко. Такое сравнительно частое применение этого приема можно объяснить и тем, что Футабатэй считал своим долгом максимально придерживаться порядка слов русского оригинала.
4. Словосочетания типа <<(предлог+) прилагательное+существительное> в оригинале, Футабатэй переводил посредством повторения одной и той же части речи японского языка. Так он пытался “пересадить” тон русского языка на японский.
5. Существенных ошибок в переводе вообще мало и, наоборот: образцов превосходного перевода не перечесть.

В 1894 году Саганоя Омуро (псевдоним Ядзаки Синсиро) тоже перевел отрывок из “Сна Обломова” и опубликовал его под заглавием “Детство Обломова” (“Обуроумофу но ёдзи”). Сравнение двух переводов позволяет нам заключить, что “Детство” соблюдает гораздо большую верность оригиналу и точность, чем “Детство Обломова”, что Футабатэй относился к переводу с большей строгостью, чем Саганоя.

Большинство указанных отличительных черт “Детства” мы находим и в первых переводах “Свидания” (“Айбики”) из “Записок охотника” и рассказа “Три встречи” (“Мэгуриай”) И. С. Тургенева. С другой стороны вышеупомянутая первая черта “Детства”, а также малочисленность примечаний в скобках и их лаконичность, отсутствие вставок на английском языке позволяет нам заключить, что отрывок был переведен позже, чем “Три встречи”, и во всяком случае, его первая половина, а частое употребление формы исторического настоящего и 4 примера “дэару” в конце предложения в “Детстве” подтверждают, что перевод этот был сделан позже, чем “Свидание”.

Таким образом можно сказать, что “Детство” является важным, определяющим звеном в процессе становления таланта Футабатэй как переводчика.